

シェリーツ王女

帝国の進攻開始から数カ月―
王国は疲弊し、
城を明け渡し形での敗戦となった。
城に住んでいた王家の人間は、
次々と帝国兵の手に掛けられていったが、
王族の中でもひとときわらう若く
容姿の整ったシェリーツは目を付けられ、
侵略国の長、皇帝の前に連れ出された。

敗戦国の王族であり、
王女であるシェリーツに対し、
皇帝は、命を奪わない代わりに
シェリーツを
妾として迎え入れる
つもりがあると話した。

シェリーツは
その申し入れを断った。
生まれた時から王家の
人間としての気品を
体得してきたシェリーツに
とって、その提案は
あまりに侮辱的であり、
そのような辱めを
受けるのであれば
王族として誇り高き
最期を迎えるという覚悟が
シェリーツにはあったのだ。

しかし、その返事を聞いた
皇帝の反応は意外なものだった。
この状況でも自分の申し入れを
断るシェリーツの度胸を気に入り、
シェリーツの意見が変わるまで
待つことにしたのだ。

シェリーツは帝国兵により
城の地下牢に閉じ込められ、
意見が変わるまで
そこで過ごすようにと
命じられた。

シヤッ

つっ……

………

全裸の状態、股間には魔術を込めた紙切れが1枚。薄ら笑いを浮かべながら舐め回すように身体中を見回す帝国兵に対し、シェリーンはただ赤面することしか出来なかった。

そして次の瞬間、身体を自由を奪われたシェリーンの身体に冷ややかで不快な粘性の物体が絡みつく――

この地下牢には、帝国によって品種改良された触手が放たれたのだ。

触手はシェリーンのその柔らかく豊満な肉体をはい回ると、魔術を込められた紙を避け、肛門へと侵入しようとした。

シェリーンは戸惑いながらも必死に足を閉じ、触手の侵入を阻もうとするが、全体を粘膜で覆われた触手には何の効果もなく、尻肉をかき分けて肛門に到達されてしまう。





勢いよく肛門に挿入された触手に
思わず驚き甘い声を
漏らしてしまうシェリオン
感じたことのない異物感と、
ジソジソと暖かい感覚に
肛門は本人の意思に反して
ビクビクと反応してしまう。

本来であれば
痛みを伴う肛門への挿入だが、
触手の身体から分泌される
粘液には、沈痛、そして
強力な媚薬の成分が
含まれている。



必死に抵抗を試みる
シェリオンだが
抵抗しようとすればするほど
肛門に力が入り、
触手を締め上げ、
より刺激を受けてしまう。
さらに肛門に触手が
往復するたびに
媚薬効果のある
粘液が塗り込まれて行き、
あっという間に
シェリオンの肛門は
快楽を生み出す
卑しい穴に成り下がって
しまった。

その感覚に戸惑い
今度は足を閉じようと
力むシェリオンだったが、
数多の触手に四肢を
絡めとられ、肛門への
刺激が阻害出来ないように
足を大きく開かれ
固定されてしまう。

人間の身体で最も
早期に発達する性感帯・肛門
男性経験も、自慰もしたことが
無い王国の姫君シェリーンは
この地下牢で、感情も持たない
異形の生物によって
人生で初めての絶頂を
迎えることになってしまった。

初めての絶頂を迎えた後も
シェリーンの拘束は
解かれることは無く
朝も夜もわからない地下牢
触手によつて肛門を
凌辱される日々が続いた。

ぬらあ...

絶頂時の肛門の
不随意運動を学習し
より効果的にメスに
性的刺激を与えるよう
品種改良されたこの触手は
体組織を作り替え、
自らの形状を変化させる。

拘束された
シリーズの肛門は、
日に日に変化していく
その触手の侵入を
拒むことを赦されなかった。

ある時は不安定な体制で
肛門を曝け出され、
段差のついた触手を
時間をかけてねじ込まれた後
突然二氣に引き抜かれたり。

またある時は
無数の細長い触手に
肛門を方々から
引っ張られたり、
優しくくすぐるように
肛門の淵や直腸を
愛撫されたり。

挿入された触手を
内部でパンパンに
膨らまされた後



力づくで思いつきり
引っこ抜かれたり。

寝る間も与えられず
続けられる凌辱―
触手を受け入れる
ことによって
シェリーンの肛門は
みるみる敏感に、
柔軟になっていった。
そしてそのシェリーンの
身体の変化に合わせて
触手もまた、次々と
新しい形の触手を
増やしていった。

1週間も経てば、
触手も、シェリーンの肛門も
今までとは見違えるような
形になっていた。
シェリーンの肛門は
快楽を誘いこまんとばかりに
なまめかしく常にその口を
ぱくぱくと動かし、
そしてその周囲をうごめく
触手も、肛門に刺激を与え
シェリーンを絶頂へと
導くための
工夫を凝らした
形状となっていた。

あまりにも禍々しい
その形状は、
シェリーンの肛門が
悦ぶ刺激を学習した
触手による最適解―
つまりこの形は、
シェリーンの身体が
無意識で望んだものだった。



身体を持ち上げられ、
肛門を頭上にした体勢のまま、
休む間もなくまた
触手による肛門開発が始まる。

より大きく、より凶悪に
進化したその触手を
乱暴に肛門内部で振り回され、
シエリーンは思わず
体中を震わせ、性器から
愛液を噴出させた。
その絶頂は、シエリーンを
失神させるほどの刺激だった

触手によって、
性交の経験がない若い王家の女性が、
もう二度と人間同士での交尾では
満足できない身体へと
変えられてしまった瞬間――
そして触手は、シエリーンの絶頂を感知し
また自身の形状を進化させるのだった。

長い長い絶頂を終え、
また新たな触手を
咥え込もうと、
抜き取られた触手を
恋しそうに
ひくひくと収縮を
繰り返すシェリシの肛門――

強制的に絶頂に
押し上げられたシェリシは
かすかに残る意識の中で
皇帝公の許しを請うたが、
眼前には、
より凶悪な形状をした
触手が、肛門をめがけて
迫っていた。

シェリシの
この責め苦は休むことなく、
1カ月もの間続いたと言う。

かばあ

おはあ
おはあ
おはあ



.....

.....













シェリーツ王女



帝国の進攻開始から数カ月―
王国は疲弊し、
城を明け渡す形での敗戦となった。
城に住んでいた王家の人間は、
次々と帝国兵の手に掛けられていったが、
王族の中でもひとときわうら若く
容姿の整ったシェリーツは目を付けられ、
侵略国の長、皇帝の前に連れ出された。

敗戦国の王族であり、
王女であるシェリーツに対し、
皇帝は、命を奪わない代わりに
シェリーツを
妾として迎え入れる
つもりがあると話した。

シェリーツは
その申し入れを断った。
生まれた時から王家の
人間としての気品を
体得してきたシェリーツに
とって、その提案は
あまりに侮辱的であり、
そのような辱めを
受けるのであれば
王族として誇り高き
最期を迎えるという覚悟が
シェリーツにはあったのだ。

しかし、その返事を聞いた
皇帝の反応は意外なものだった。
この状況でも自分の申し入れを
断るシェリーツの度胸を気に入り、
シェリーツの意見が変わるまで
待つことにしたのだ。

シェリーツは帝国兵により
城の地下牢に閉じ込められ、
意見が変わるまで
そこで過ごすようにと
命じられた。



シャラ

ううー……

………

全裸の状態、股間には魔術を込めた紙切れが1枚。薄ら笑いを浮かべながら舐め回すように身体中を見回す帝国兵に対し、シェリーンはただ赤面することしか出来なかった。

そして次の瞬間、身体を自由を奪われたシェリーンの身体に冷やかで不快な粘性の物体が絡みつく――

この地下牢には、帝国によって品種改良された触手が放たれたのだ。

触手はシェリーンのその柔らかく豊満な肉体をはい回ると、魔術を込められた紙を避け、肛門へと侵入しようとした。

シェリーンは戸惑いながらも必死に足を閉じ、触手の侵入を阻もうとするが、全体を粘膜で覆われた触手には何の効果もなく、尻肉をかき分けて肛門に到達されてしまう。





勢いよく肛門に挿入された触手に
思わず驚き甘い声を
漏らしてしまうシェリオン
感じたことのない異物感と、
ジーンと暖かい感覚に
肛門は本人の意思に反して
ビクビクと反応してしまう。

本来であれば
痛みを伴う肛門への挿入だが、
触手の身体から分泌される
粘液には、沈痛、そして
強力な媚薬の成分が
含まれている。



必死に抵抗を試みる
シェリオンだが
抵抗しようとするほどの
肛門に力が入り、
触手を締め上げ、
より刺激を受けてしまう。
さらに肛門に触手が
往復するたびに
媚薬効果のある
粘液が塗り込まれて行き、
あつという間に
シェリオンの肛門は
快楽を生み出す
卑しい穴に成り下がって
しまった。

その感覚に戸惑い
今度は足を閉じようと
力むシェリオンだったが、
数多の触手に四肢を
絡めとられ、肛門への
刺激が阻害出来ないように
足を大きく開かれ
固定されてしまう。

拘束された
シェリーツの肛門は、
日に日に変化していく
その触手の侵入を
拒むことを赦されなかった。

ある時は不安定な体制で
肛門を曝け出され、
段差のついた触手を
時間をかけてねじ込まれた後
突然二氣に引き抜かれたり。

またある時は
無数の細長い触手に
肛門を方々から
引っ張られたり、
優しくすぐるように
肛門の淵や直腸を
愛撫されたり。

挿入された触手を
内部でパンパンに
膨らまされた後



力づくで思いつきり
引っこ抜かれたり。



寝る間も与えられず
続けられる凌辱—
触手を受け入れる
ことによって
シェリーンの肛門は
みるみる敏感に、
柔軟になっていった。
そしてそのシェリーンの
身体の変化に合わせて
触手もまた、次々と
新しい形の触手を
増やしていった。

1週間も経てば、
触手も、シェリーンの肛門も
今までとは見違えるような
形になっていた。
シェリーンの肛門は
快楽を誘いこまんとばかりに
なまめかしく常にその口を
ぱくぱくと動かし、
そしてその周囲をうごめく
触手も、肛門に刺激を与え、
シェリーンを絶頂へと
導くための
工夫を凝らした
形状となっていた。

あまりにも禍々しい
その形状は、
シェリーンの肛門が
悦ぶ刺激を学習した
触手による最適解—
つまりこの形は、
シェリーンの身体が
無意識で望んだものだった。



身体を持ち上げられ、
肛門を頭上にした体勢のまま、
休む間もなくまた
触手による肛門開発が始まる。

より大きく、より凶悪に
進化したその触手を
乱暴に肛門内部で振り回され、
シエリーンは思わず
体中を震わせ、性器から
愛液を噴出させた。
その絶頂は、シエリーンを
失神させるほどの刺激だった

触手によって、
性交の経験がない若い王家の女性が、
もう二度と人間同士での交尾では
満足できない身体へと
変えられてしまった瞬間――
そして触手は、シエリーンの絶頂を感知し
また自身の形状を進化させるのだった。

長い長い絶頂を終え、
また新たな触手を
咥え込もうと、
抜き取られた触手を
恋じろくに
ひくひくと収縮を
繰り返すシェリッソの肛門――

強制的に絶頂に
押し上げられたシェリッソは
かすかに残る意識の中で
皇帝公の許しを請うたが、
眼前には、
より凶悪な形状をした
触手が、肛門をめがけて
迫っていた。

シェリッソの
この責め苦は休むことなく、
1カ月もの間続いたと言う。

かばあ

おはあ
おはあ
おはあ